Mood（法）の一考察
Subjunctive Mood を中心として

土 居 琢 磨

新しい言語学者の一人 Chomsky[1] は，Syntax の研究を基礎として Semantics は存在し，逆に Syntax は Semantics から独立すると考えて居る。一般的に，Phonetic form→Linguistic form→Meaning の順序をとる。しかし，Meaning→ Linguistic form の研究も一つの方法として認めてよい。

(1) (i) The picture was painted by a new technique.

(ii) The picture was painted by a real artist.

において，Phrase Structure のレベル即ち IC (Immediate Constituent) 分析では何れも $NP-was+Verb+en-by+NP$ と同じ形になるので，それに変形分析を加えると，(ii) は A real artist painted the picture の受動形（Chomsky のルール表で示すと〔12〕Structural analysis: $NP-Aux-V-NP$; Structural change: $X_1-X_2-X_3-X_4\rightarrow X_4-X_2+be+en-X_3-by+X_1$[2]）であり，(i) は (Someone) painted the picture by a new technique からの Passive transformation と，Passive における agent を省く 'elliptical transformation'[3]（省略も一つの変形），この 'double transformation' をうけたものである。

実際の言語生活で，(i)と(ii) を混同する事はあるまい。一般意味論の立場から，John beats Jim と Jim is beaten by John において，'beat' が「打つもの (fundament)」「打たれるもの (terminus)」と言う相関関

---

[1] N. Chomsky: *Syntactic Structures* Chap. 9

[2] $NP\rightarrow T+N$; $T\rightarrow the$; N→*man*, *ball*, etc. (*ibid*. 4.1)

[3] N. Chomsky: *ibid*. p.81 fn. 7; 8.2

係の二項を含み，どちらを直格で (in modo recto)，どちらを相関的に斜格で (in modo obliquo) で表象するかによって動詞形式が異なり，何れの項を主辞とするかで二通りの思考形式が成立し，Voice なる文法範疇が認められる。actor と actress は相関関係であって，意味の上からは，後者が前者からの派生ではなく，唯，語形成として actor→actress が考えられる。同じく，受動の概念は能動の概念から派生したのではなく，言語形式上，*beats* から *is beaten* への変形として説明すれば，英語構造の記述が簡潔に出来ると言うに過ぎない。意味上からの意識の modus と言語形式は明らかに区別される。(i) は picture と someone の対立を示す程に相関関係が正面に出ずに (*e.g.* He was killed in the war)，Copula +Predicativeと平行し，(ii) と区別される。つまり，文法研究では，意味がどの様な外部構造をとるかは，外部構造を如何に解釈するかと言う問題と同様に重要である。

Subjunctive Mood は，3人称単数現在形で *−s* を用いない動詞，例えば (he) *bind* (<OE. *binde* cf. *bindeþ*) や *be* (<OE. *bēo*)，(he) *were* を除き，屈折語尾が levelling して Indicative Moodとの区別がなくなった。You *had* better go there は一種の fossilized form と見做す。(*had*の発生について，拙稿では割愛する。) (he) *were* についても I wish I *were* rich と並んで Indicative *was* の使用が既に300年前に遡る事を *O.E.D.* (*be* Ⅲ.7) は明記して居る。語形上 Subjunctive の distinctive form が殆んど消失した今日，これを Tense の問題として扱う学者，例えば Jespersen,[4] Kruisinga,[5] Zandvoort[6] (特に Imaginative Tense[4] の理論は代表的) に対して，意味を重視して[7]，Subjunc-

[4] O. Jespersen: *A Modern English Grammar* Ⅳ §9

[5] E. Kruisinga: *A Handbook of Present-day Enlish.* Ⅱ. §§ 29—40

[6] R. W. Zandvoort: *A Handbook of English Grammar* §.2.§.219 etc.

[7] *cf.* "it is necessary to consider *meaning* rather than *form.*" (C. T. Onions: *An Advanced English Syntax* § 138.4)

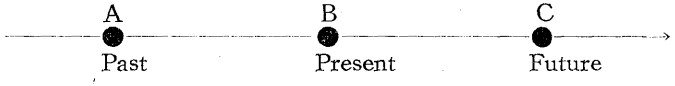
tive は extinct mood ではないと明言する Curme[8] Onions[7] 等が居る。Sonnenschein[9] も矢張り後者に属する。拙稿では，Subjunctive Mood は文法範疇として可能か否かを中心に考えてゆきたい。

言語記号（Symbol）とそれが示す Referent の間には，アプリオリに内在する両者不可分の関係はなく，唯，任意的なものに過ぎないので，先ず，意識の modus からみて，それが特定の言語形式をとる場合に，はじめて特定の文法範疇が考えられる。

我々の意識の対象となるものは凡て時間規定が与えられる。或るものを「過去のもの」「現在のもの」「未来のもの」と称する場合の modus は「赤いもの」「大きいもの」と言う様な色彩，形状の附随性を与える場合の modus とは異なる。

意識の根本的な様相として，表象，判断，情意を認めるとすれば，表象は「もの(こと)」を頭に想い浮べる働きであり，判断はこれを承認（又は拒否）する作用，情意は対象についての感情の表出（表現形式としては，愛憎，欲求表現としての感嘆，命令，疑問の形が含まれる）の作用である。判断には単純判断即ち「Aがある」型と，二重判断即ち「AはBである」型（*e.g.* The rose is red. The boy came here）がある。

次に，時間関係を線で表わすとすれば，



Speaker は常に B点に位し，A，B，C点にあるものを勿論，判断出来る事は言う迄もないが，Bは直格で（in modo recto）判断されて居るに反して，A，C は各々現在より一定の距離をもつものとして判断されて居る。A，C点の対象を判断する際，B点とは異なって斜格で（in modo obliquo）表象されて居る事が前提となる。従って，時間意識は判断より

[8] G. O. Curme: *Syntax* § 40 and pp. 390—430

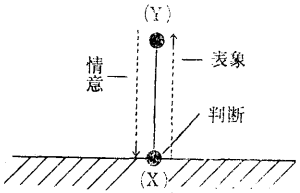
[9] E. A. Sonnenschein: *The Soul of Grammar* § 85

も表象の modus に帰せられよう。しかし，この時間意識における斜格は「もの(*e.g.* 花)」を表象する場合の斜格とは区別される。事（物）を経験する際，その対象が外部的（＝物的）なものもあれば，内部的（＝心的）なものもある。前者は外部知覚（＝感覚）後者は内部知覚（＝意識の意識）と言える。外部知覚と言っても，必らず，外部的対象を知覚したと言う意識，即ち内部知覚が伴なう。そうでないと「過去のもの」を想起出来ないし，従って，時間関係の意識もあり得ない。「花」の知覚においても，表象作用を行なう自分自身が内部知覚により承認され，自己が本来的意味で in modo recto に判断されて居るのに反して「花」は in modo obliquo で考えられて居る。しかもこの種の反省作用は人間の無意識の裡で行われて居るに過ぎない。想像の対象である「花」は心的作用をなす自分自身に対立して in modo obliquo に考えられるが「過去や（未来）のもの」は「現在」から一定の距離をもつものとして in modo obliquo で考えられて居る。この時間意識における特別な表象の modus が特別な言語形態をとる限り，Tense なる文法範疇が認められる。この時間意識における modus と異なる modus が,「花」を知覚する場合に考えられた。しかもこの modus として，前述の表象，判断，情意の3種があるが，これらが言語表現上，特殊な形式をとる場合，Mood なる文法範疇が存在する。[10] 普通, Subjunctive, Indicative, Imperative と呼ばれるものがそれであるが，これら両方のグループは互に一致するとは限らない。ここで，上の3種の modus を図示すると，次頁の様になると思う。

即ち, Speaker は常にX点に立つ。このX点で或る対象を承認(拒否は負

---

[10] *cf* J. Sledd: *A Short Introduction to English Grammar* p.227. "The term *mood*, or *mode*, refers to distinctions in verbal forms which indicate the retations between one verbal in the sentence and another or which show the speaker's attitude toward the state of affairs which a verbal represents."



Actuality (*or* Fact) phase

(一)の承認と解してよい）する場合が判断であり，或る対象を想い浮べる事は，Fact phase から遊離するY点に対象を位置ずけて表象する事であり，情意とは，Y点における対象をX点まで近ずけよう，換言すれば，現実化させようとする欲求であり，憎念は対象への欲求が負(一)をおびて現実化の方向をもつものである。

Mood はこの modus が動詞の語形に明示された場合のみ問題となるので，Syntactic category であって Notional category[11] ではない。これを明らかにしておかないと，lexical なものに過ぎないのに Deutschbein が16種の Mood を挙げて，*He is sure to go* までも Expectative Mood と名ずけた様な結果になる。

(3) I think my wife *be* honest and think she *is* not.

(Shakespeare: *Oth.* Ⅲ. iii. 384)

において 'I think' は事実として内部知覚によって判断（客観性の意識）されて居るが，'my wife *be* honest' 'she *is* (not) (honest)' は何れも，核文（Kernel）としての二重判断 'My wife is honest' と異なり 'my wife's honesty' を表象，換言すれば，'my wife being honest' なる一種の判断内容が想い浮べられて居る。判断内容の表象表現は一応，Subjunctive Mood と考えられるが，(3)の例からみても，*is* が *be* と語形上区別される限り，形態上の対立から生じる system を研究するのが文法であるので，仮令 Thought を表わして居ても，両者は各々，Indicative, Sub-

[11] *cf.* O. Jespersen: *The Philosophy of Grammar* p. 313

junctive として記述すべきである。同様に，情意表現が必ずしも Imperative Mood とは言えない。'How pretty she is!' は，情意（ここで，愛好，憧憬が呼び入れられて居る）を表わすにも拘らず Indicative Mood が用いられて居る。'Is he tired? なる Question も亦，'He is tired' と言う判断を前提として，その正否を知りたい欲求を根底とする情意表現である。逆に，Imperative は必ずしも情意ではなく，'*Take* care of the pence, and the pounds will take care of themselves' は意味上，'If you take care of the pence, the pounds……' と equivalent であって，条件を示す表象表現である。Indicative Mood は字義通り Fact Mood [12] ではない事が判る。古い Subjunctive の動詞屈折語尾が今日，殆んど無くなった事は，それらによって表現される意識の modus が変貌した事を意味するのではなく，Periphrastic form や，単一動詞の Indicative で表現される様になったに過ぎない。[13] 「ことば」では必ずしも言語形式と意味は平行しない。

元来，Subjunctive (<L. *subiunctiuus cf.* F. *subjonctif*) は文字通り Subordinate clause 特有の Mood であり，[14] OE. においては今日のドイツ語と同じく広く用いられた。

(4) (i) OE. Ic gelēfe ; æt he *cume*. (: Mod E. I believe that he (may) come.)

---

[12] *cf.* H. Sweet: *A New English Grammar* § 303

[13] Curme は PE において，Subjunctive よりも Indicative の方が漸次多く用いられる現象に関して 'our way of thinking' が変化した為であると述べ，更に 'Today we decidedly prefer to look at many things, not as mere conceptions, but as things near to us, as actual problems with which we must deal. The indicative is never a substitute for the subjunctive, but is always felt as an indicative, (*Syntax*. § 40) と言う説明には，私は首肯出来ない。

[14] *cf. Oxford English Dictionary*: *Subjunctive* A. 1 b. and W. W. Skeat: *A Concise Etymological Dictionary of the English Language*: *subjunctive*, *subjoin*.

(ii) OE. Ic wilnige *þæt* he *cume*. (:Mod E. I wish that he (may) come.)

(iii) OE. Hīe cwǣdon *þæt* hē *wǣre* gōd cyning. (:G. Sie sagten daß er ein guter König *wäre*.)

ここで 'Ic gelēfe' 'Ic wilnige' 'Hīe cwǣdon' は二重判断であり，*þæt* 以下の clause は何れも表象である事[15] は既に述べた通りである。しかし，今日の様に Indicative の例もある。

OE. nū wē willaþ secgan *þæt* wē fūse sind ūrne eard to sēcanne.
(: Mod E. now we wish to say that we are starting to seek our country.)

Shakespeare 時代になると, Indicative や Periphrastic form を形成する Auxiliary verbs の使用が目立つ。今日，Subjunctive Mood が英文法上認められるか否かに就いて，意味論の立場から言えば，可能である事を既に述べた。屈折語尾の levelling の結果，殆んど Indicative と語形上，区別がつかなくなった Subjunctive Mood に関する説も色々ある。簡単にこれをみよう。

Onions によると，

(5) I wish I *had* a violin.

---

[15] *cf.* 関根秀雄:「仏語動詞時法考」pp.148—149「Je sais qu'il est parti に対して，Je doute qu'il soit parti と言う習慣は，古今を通じて不変である。明瞭に，前者は certitude を，後者はその反対を示すのだからである。然るに，今日では Je crois qu'il est parti ということに一定しているのに第17世紀迄は，Je crois qu'il soit parti と言う方が一般的規則となっていた。今日では croire とあるからには確実性が多いと言うのであるけれども，よく考えて見れば，確実不確実の割合を決するのは要するに主観なのであるから，この subordonnée は，時によっては subjonctif で書かれてもよい筈である。je crois と言っても，それは主観的確実であって，客観的には il n'est pas encore parti という事実があるかも知れないのである。恐らく古典時代の人々は そう考えて居たのだろうと思われる。」

は意味上，'I wish it *were* possible for me to have a violin' と equivalent であり，

(6) It is necessary that I *remain* here.

における *remain* の Mood 判定の 'test' として，'I' の代りに 'he' を代入すれば，同じ clause の中で *he remain* と「言い得る」("we can say") 故に，(6)の*remain* は (5)と同じく Subjunctive であり，この Mood は今尚 'living Mood'[16] である。

Curme は更に意味を重視し，Subjunctive を 2 種に分けて，(a) 希求，予定されたものとして表現する Optative Subjunctive，(b) 事実としてではなく 'a conception of the mind' として表現する Potential Subjunctive として居る。(a) (b) を更に細分して色々例を挙げ，例えば，'I *am to go* ... tonight' を Subjunctive of Plan と名ずけて (a)に入れたり，Mary *can* (*may*) *walk* ... や I offer a reward to anyone who *shall give*… の様な Periphrasticなものまで(b)に入れて居る。[17]

Sonnenschein は，一応，*be—am* or *is*; *were—was*; *have—has* の様な distinctive form に視点を向けながらも，context によっては Subjunctive である得る．即ち，

(7) If he *loved* me, he would behave differently.

で，*loved* の modal meaning は，If he *were* my friend, he would behave differently における *were* のそれと同じであって，現在時に言及し，'the unreality of the supposition' を表わす故に Subjunctive と見做す。*was* と*were* を除く動詞の Past Indicative と Past Subjunctive は発音上の変化により同一形となったが，或る語形が Subjunctive か否かは，historical grammar に頼れば判定が出来ると言って，歴史文法の

---

[16] C. T. Onions: *op. cit.* § 138

[17] G. O. Curme: *op. cit.* pp. 390—430

必要性を説いて居る。[18]

OE より Mod E に至る史的概観が目論まれて居る場合，Optative の名のもとに凡ての Subjunctive を記述した Trnka の方法[19] は，Sonnenschein の方法とは自ら異なる。Sonnenschein は ModE を記述するのが目的である。文法が科学である限り，矢張り，所与の国語の所与の時期での事象を叙述する際には，その時期に顕現して居る事象に基ずき，文法範疇を定める方が合理的であると思う。歴史を重んじる事は差し支えないが，それに迷わされて，現在，存在しないものを，恰も存在するが如くに取扱う事は避けるべきであろう。

Curme の Periphrastic form に関する説明は，助動詞や Tense の問題として論ずべきものであると思う。

Onions の言わば代入法をそのまま用いると，「意味」の上からみても Thought を表わす次の3例

(8) If by your art, my dearest father, you *have*
Put the wild waters in this roar, allay them.
(Shakespeare: *Temp.* I. ii. 1—2)

(9) if he *have* never *drunk* wine afore, it will go near to remove his fit (*ibid*: II. ii. 77—78)

(10) If thou *hast slain* Lysander in his sleep,

---

[18] E. A. Sonnenschein (*op. cit.* § 85,) は "My definition of 'mood' limits the term to *forms of the verb.*" と述べ，更に次の様に記して居る "But the meanings of the past indicative and the past subjunctive remain very much what they were in Anglo-Saxon times; and they are felt to be distinct by the modern Englishman. If there were no such thing as historical grammar in existence, it might be difficult to give a grammatical explanation of this twofold meaning of identical forms; but as it is, there is no such difficulty."

[19] *cf* B. Trnka:（斉藤静訳）「動詞文章法史的概論」pp. 114—140

Being o'er shoes in blood, plunge in the deep,

And kill me too. (Shakespeare: *M. N. D.* Ⅲ. ii. 47—49)

で，(8)の You の代りに(9)で he を用いると，*have* (never) *drunk* と「言い得る」ので，*have put* は Subjunctive と見做される。しかし，同じ理由から(10)で thou を用いると，*hast slain* と「言い得る」ので(8)の *have put* は Indicative と見做される事になり，意味を基礎とする代人法を Mood 判定の test 資料とする限り，排中律に反する。(8)の様な *have put*[20] は，後で述べる変形分析で用いられる英語の核文（単純な平叙能動文）'you have put'（＜'you put'）と同じく，矢張り Indicative と考える方が妥当である。

これらに対して，語形から Subjunctive を考える説に簡単に触れよう。

(11) (i) If he *were* rich, he would pay you.

(ii) If he *is* rich, he will pay you.

(i)，(ii) 共に現在（又は未来）に言及するが，(i) は Rejecting condition を示す点において (ii) と異なる。この微妙な機能を表わす *were* も，1，3人称単数主語が前に来ると，*was* にとって代わりつつある事は既に述べた。特に *was*, *were* 以外の動詞，例えば，

(12) (i) If he *came* here today, I should be glad.

(ii) He *came* home yesterday

において，(i) (ii) の*came* の機能を混同する怖れがない事から，単数主語に続く場合，*were*→*was* に一種の levelling をうけつつある。従って，(11) (i) の *were* の位置に *was* を用いた形や (12) (i) の *came* を，Indicative Preterit が非現実性を示す用法として Tense の問題として考える学者に Jespersen, Kruisinga Zandvoort 等があり，Jespersen の

[20] *You have put* (*cf.* You put) の分析については N. Chomsky: *op. cit.* p. 68参照

Imaginative Tense[21] の説はここに根拠をおく事は言う迄もない。

元来，Tense は特別な表象の modus に帰せられる時間意識を基礎とする文法範疇であり，過去時は現在から一定の距離をもつものとして考えられ，過去時に起った事を回想する人間の意識は，現実性を帯びた現在のものから遊離したものをその対象として居る。Preterit はこの様に not actually present のものを cover し，非現実性の表現に転用される事は自然の推移であろう。更に Preterit に内在する非現実性の要素が恰も「自乗されたかの様に」[22] Pluperfect が用いられて，現在時における impossibility や improbability を強調する場合があるのも首肯出来る。

(13) (i) If I *had* the money, I should pay you.

(ii) If I *had had* the money (at the present moment), I should have paid you.

Kruisinga[23] は，"The term preterite includes two entirely unrelated functions of the verbal [id]: (1) as a past tense, (2) as a modal form" と言い，narrative や iterative な Preterit の用法の外に，表現されて居る idea を「現実性の乏しい」（'more remote'）ものにする事によって，話者の 'hesitation' を表わす例（I thought he was to lecture next week）について述べ，この種のPreterit が，徐々に，Past time に関係のない表現に用いられた 'Preterite of Modesty' の例を A. Bennett から借りて，"Do you want……?" の意味で，shop-girl や clerk の用いる "Did you want……?" を挙げて居る。

---

21 O. Jespersen: *M. E. G.* Ⅳ § 9 'Verbal forms which are primarily used to indicate past time are often used without that temporal import to denote unreality, impossibility, improbability or non-fulfilment. In such cases we speak of imaginative tenses or tenses of imagination.'

22 O. Jespersen: *M.E.G.* Ⅳ § 9.7(9)

23 E. Kruisinga: *op. cit.* §§ 29—40

これらの用法と並んで 'irrealis' を表わす用法として, *if, as if, though, as though*, 等で導かれる clause で用いられる例を挙げ, 更に Relative clauses で不明確な未来時に言及する例文として,

(14) Nothing could be more interesting and useful at the present time than a book which *suceeeded* in doing what this book sets out to do

を記して次の様に述べて居る。

"We see, therefore, that the irrealis may be the means of arriving at a preterite of modesty; the result is similar to the preterites of 35 (= preterite of modesty), but the route by which it has been reached is different."

しかし, 'irrealis' の用例中に (14) を入れてしまってから, Preterite of irrealis が未来時に言及する場合がある, と言うのは何故だろうか。Kruisinga の方法は,

$\left(\begin{array}{l}\text{Narrative}\\ \text{Iterative}\\ \text{Descriptive}\end{array}\right)$ Preterite→Preterite of remoteness →Preterite of modesty←Preterite of irrealis

の様であるが, (14) を何故最初から Preterite of modesty の一種と見做す事が出来ないのであろうか。"two entirely unrelated functions" と断っておきながら, 結果として両者は互に「関係がある」事を "We see...." の説明で述べて居る。しかも両者接近の "route" が, 私には聊か奇異に思われる。Kruisinga の *Handbook* 全体の主流は「機能」よりは寧ろ「形態」から出発し, その Preface に明記の通り歴史的取扱いは避ける事にある。Preterit が含蓄する remoteness, hesitation, 更に modesty を Tense 論で見極めて居る以上, notional な時間関係を抽象して, 単なる thought を表わす契機が内在し, これ故に Preterit が irrealis 表現に転向し易いと考える事は出来ないだろうか。私は, 矢張り上の "route" を次の様に改める方が妥当であると思う。

… Preterit of modesty→Preterit of irrealis

Zandvoort は Subjunctive の名のもとに,

(15)(i) as though she *were* ……

(ii) I wish it *were* ……

(iii) If I *were* you, I should go.

を挙げて居る。[24] しかし同時に, Modal Preterit の名称で Tense の一機能としてもこれらを考え,

(16) (i) I wish I *knew* ……

(ii) If I *were* you, I should go and tell him.

(iii) He acts as if he *owned* ……

等[25] を記して居る。ここで (15) (iii) と (16) (ii) の *were* は異なるものであろうか。 Tense の問題として取扱いながらも同時に, Subjunctive Mood として同一語を重復して取扱って居る様である。これは, 古い英語で distinctive な Subjunctive が用いられた処にあるこれらの語を, Tense の問題として論じながらも Mood への心残りを示す証左の様にみえる。矢張り, (15) と (16) (ii) は Subjunctive と見做し, (16) (i) (iii) は (5) *had*, (7) *loved*, (12) (i) *came*, (13) (i) *had*, (ii) *had had* と同じく, Tense の章で論ずる方がよい。

ここで, Subjunctive Mood の代表的な型について, 意味から, 次に, その構造を分析してみよう。先ず,

(17) (i) God *save* the King!

(ii) God *bless* you!

等の文の根底には, 1つの「こと」として表象する働きがある様に思われる。換言すれば, (17) は "That God ...."[26] と言う名詞化された内部言

---

24 R. W. Zandvoort: *op. cit.* § 219

25 R. W. Zandvoort: *op. cit.* § 138

26 *cf.* O that I *were* a fool! (Shakespeare: *A. Y. L.* Ⅱ. vii. 42) は明らかに1つの表象表現である。

語形式の表象を基礎とするものであると，私は一応考えておきたい。(17)を I pray (that) God (may) bless you に還元する事が，通時的に (diachronically) にみても悖るもであり，文法上(17)が単文である事[27] は言う迄もないが，根本的意識の modus からみると表象の modus に帰せられる限り，内部言語形式を引合に出すのも，英文構造記述の1つの方法として容れられると思う。

意味の上から，

(a) If A is, B is. (AがあればBがある) は rewrite して，

(18) I don't believe that A without B is.

(b) If A is, B is not. は同じく，I don't believe that A with B is. として差し支えない。(a)と(b)の基本的型は同じであるので，(a)だけについて言えば，前述の通り，that 以下は単に表象であって，判断は，その表象を否定する処に働きかけて居る。この判断表現が I don't believe である。この I don't believe は内部言語形式として認められるだけで，意味上，If-clause は表象表現であるが，既述の通り Indicative の語形が用いられて居るに過ぎない。

ついで，種々の名詞表現を簡潔に generate する為に，核文を名詞化する変形のルールを述べた Lees[28] と，前述の Chomsky の理論に私見を加えて，(17)で想定した内部言語形式と，(18)を変形分析によって導くルールを，各々，GT_1, GT_2 で作ってみよう。矢張りここでも，2つの source string から generalized transformation によって1つの文が generate されたものと見做す事が出来る。即ち，(i) (=constituent sentence) から generate した変形形式を (ii) (=matrix sentence) のある構成要素 (ここでは $T+Na$, 最も簡素な形としては *it*) に代入して，新しい string 即ち (iii) を generate する。

---

[27] *cf.* 細江逸記:「動詞叙法の研究」pp.30—35

[28] R. B. Lees: *The Grammar of English Nominalizations*. Chap.3

(17) に関して，

GT_1 ：

$$\left.\begin{array}{ll}(\mathrm{i}) & \mathrm{Nom}-(\mathrm{Prev})\ \mathrm{VP} \\ (\mathrm{ii}) & \mathrm{G}-\mathrm{T}+\mathrm{Na}-\mathrm{Y}\end{array}\right\}\rightarrow(\mathrm{iii})\ \mathrm{G}-\mathrm{that}+\mathrm{Nom}+(\mathrm{Prev})\,\mathrm{VP}-\mathrm{Y}$$

$$\mathrm{G}=\mathrm{Nom}-(\mathrm{Prev})\ \mathrm{Aux}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{Vt}_1 \\ \mathrm{Vt}_2 \\ \mathrm{Vt}_3+\mathrm{P}\end{array}\right.\ ;\quad \mathrm{T}=\mathrm{The}\,;\quad \mathrm{Na}=\text{abstract noun};$$

Nom＝Noun phrase；　Prev＝*always*, *never*, *etc.*;

VP＝Aux＋MV；　Aux＝ Te Mo(M) (*have*＋En) (*be*＋Ing)；

MV＝main verb；　Vt_1＝*believe*, *doubt*, *know*, *etc.*；

Vt_2＝*pray*, *wish*, *demand*, *suggest*, *require*, *etc.*；

Vt_3＝*insist*(*on*), *complain*(*about*), *etc.*；　P＝preposition;

$$\mathrm{Te}=\text{Tense morpheme}\,;\quad \mathrm{Mo}=\left\{\begin{array}{l}\text{Indicative}\\ \text{Subjunctive}\\ \text{Imperative}\end{array}\right.\ ;\quad \mathrm{M}=\textit{can},\ \textit{may},$$

must, *shall*, *will*, *etc.*

(iii) の that＋Nom＋(Prev)VPは (ii) の抽象名詞表現を受ける事に注意すべきであり，換言すれば，名詞化された Clause であって，意味論からは表象と言うべきものであろう。(iii) の G－that が，Chomsky の言う 'elliptical transformation' をうけて generate されたものが，(17) (i) (ii) であると見做して差し支えあるまい。

(18) についても同様に，A is and B is not (→A without B is) と I don't believe it から generate される I don't believe that A without B is は，次の通り rewrite される。

GT_2 ：

$$\left.\begin{array}{ll}(\mathrm{i}) & \mathrm{Nom}_1+\mathrm{without}+\mathrm{Nom}_2-(\mathrm{Prev})\,\mathrm{Aux}+\mathrm{be}^1 \\ (\mathrm{ii}) & \mathrm{G}-\mathrm{T}+\mathrm{Na}\end{array}\right\}\rightarrow(\mathrm{iii})\ \mathrm{G}-\mathrm{that}-$$

$\mathrm{Nom}_1+\mathrm{without}+\mathrm{Nom}_2-(\mathrm{Prev})\,\mathrm{Aux}+\mathrm{be}^1$

(iii) における $\mathrm{Nom}_1+\mathrm{without}+\mathrm{Nom}_2\rightarrow\mathrm{Nom}$ として rewrite すると

(iii) は次の様になる。

(iii)^1 G－that＋Nom＋(Prev) Aux＋be^1

be^1 ≒ Vcop (＝Copula)

尚，Lees は，'Prev' (＝E(*i.e.* Emphasis morpheme), not) と言う構成要素を作ると，Pvb (＝ *always, never, etc.*) と同じ扱いが出来る便利さから，IC構造（即ち，Phrase structure）で *not* を取扱って居るが，その後の複雑な義務変形を考えると，私は，矢張り Chomsky の変形分析のルール (16) T*not*－optional：

$$\text{Structural analysis}: \begin{cases} NP-C-V\cdots \\ NP-C+M-\cdots \\ NP-C+have-\cdots \\ NP-C+be-\cdots \end{cases}$$

$$\text{Structural change}: X_1-X_2-X_3 \rightarrow X_1-X_2+\text{n't}-X_3$$

によって，ここでも，GT_1 の G と同じく，GT_2 の G を整理したい。

従って，GT_1 (iii) と GT_2 (iii)^1 は同じ形となり，G が判断されて居るに過ぎず，that＋Nom＋(Prev) Aux＋be^1 は抽象名詞表現をうけついで居る事に注意すべきである。

(15) の例文中，Subjunctive *were* の前に複数主語が用いられると，*were* は Indicative Preterit と同形になるので，Subjunctive は一層，'moribund'[29] の状態を呈し，所謂 lost-inflexion の Mod E では，Subjunctive の語法に対する sensibility が萎縮したと言えよう。それと同時に，Periphrastic form が増加して古い Subjunctive の機能をもつに至った。しかし，"If it *should rain*, · · · " "It is natural that he *should do* so" の如き所謂 Modal aux＋V の Periphrastic form を，Subjunctive Mood と称する事に私は同意出来ない。これらは Tense や助動詞の問題と

[29] H. W. Fowler : *A Dictionary of Modern English Usage. subjunctives* p. 574

して論ずべきものであって，仮令「仮装叙想法」[30] と称する事が出来ても，Subjunctive Mood の範疇に入れるべきものではないと思う。

Indicative Mood は「もの（こと）」を Fact（判断の modus）として表現する Mood であり，Subjunctive は表象として表現する Mood である，と言う原理的な説明よりも，Indicative はそれを用いない方がよいと言う特別の理由がない限り一般に用いられる 'normal Mood'[31] であると称し，相対的に Subjunctive に消極的な説明を与える方が妥当であろう。

この消極性の故に，比較的新しい I wish I *was*…… の如き形と相俟つて，Tense の項目で論ずる方法も一応は考えられるが，were—was の対立，特に今日，米国で屢々用いられる

(19) (i) Joanna had insisted that he *come*.[32]

(ii) I insisted that I *be* given.....[33]

(iii) It is suggested that before he *be* classed for overseas that he *be* interviewed[33]

の様な語形がある事からみても，尚，前述の意味論からみても，更に，Subjunctive を generate する変形のルールとして試作した GT_1 と GT_2 からみても，私は，Subjunctive Mood を1つの文法範疇として認める方がよいと思う。

Indicative Mood と呼ばれるものの中に，意味と形態が平行しないものがあっても，それらの錯綜は表現形式上のものであって，人間の意識の modus にこれと平行する錯綜があるのではない。古くは Subjunctive なる動詞の屈折語形で表わされて居た ideas が，今日，表現されなくなったと言うのではなく，前述の通り他の方法，特に 'function words'（Fries

---

[30] 細江逸記：*op. cit.* p. 124

[31] O. Jespersen: *Essentials of English Grammar* § 27.(2)

[32] R. W. Zandvoort: *op. cit.* § 216

[33] C. C. Fries: *American English Grammar* pp. 104—105

よる Group B[34] の一部）を伴う語形で表現される場合が多くなったと言う事に過ぎない。'He *starts* for Tokyo tomorrow' が未来時に言及するからと言って，Tense 論でこれを未来時制と称する必要が全くないのと同様である。従って，'Present Subjunctive,' 'Past Subjunctive' の名称が "misleading"[35] であると烙印をおす必要はあるまい。

（付記）本稿は，北九州大学外国語学部紀要 I 新輯第 4 号記載の「現代英語に於ける Subjunctive Mood」第一章を修正加筆したものである。

---

[34] C. C. Fries: *The Structure of English* pp. 90—91

[35] *cf.* B. Evans & C. Evans: *A Dictionary of Contemporary American Usage*, p. 484 "The English verb has three forms that are used in a subjunctive sense. These are illustrated below. The first, called the present subjunctive, merely shows that what is being talked about is an idea and not a fact. The second, called the past subjunctive, stresses the uncertainty or improbability of a statement. The names *present subjunctive* and *past subjunctive* are misleading, because in modern English there is no time difference between these forms. Instead, they express different degrees of certainty. Both refer indefinitely to the present or the future. The third form, the *past perfect*, refers to the past.